

スポーツで築く健康で豊かな地域社会



▲早朝、市街地を走る「熊本走ろう会」の皆さん

県民総スポーツ運動の推進を

県民総スポーツ運動のめざすところ、それはスポーツによって培われた住民相互の連帯感にもとづく、活力のある地域社会の形成です。したがってこの運動の推進にあたっては、住民の生活圏を主体にしたコミュニティスポーツが基盤に置かれています。

ここでは、コミュニティスポーツの実践者、学識経験者、町教委、県教委の方々にお集りいただき、県民総スポーツ運動の現状、問題点、対策、今後の課題をお話しいただくなかで、コミュニティスポーツを意義づけ、県民の皆様にスポーツ活動への自主的参加を呼びかけます。

＝ 座 談 会 ＝

出席者

- | | |
|-----------------|-------|
| 八代市 出町ゲートボールクラブ | 水島 勇 |
| 松橋町婦人バレーボール愛好会 | 松浦 啓子 |
| 北部町社会教育主事 | 福島 幹敏 |
| 熊本女子大教授 | 伊藤 基記 |
| 県体育保健課 課長 補佐 佐健 | 川野 衡平 |
| 県民スポーツ係長 | 荒木 時弥 |

(司会)

我が町のコミュニティづくりとスポーツ

八代郡竜北町長

田河 吉雄

に市町村の各居住区での活動が主体となつてくると思います。そこで、この運動の重点は、市町村での活動をどう活発にしていこうかというところに置いてあります。

スポーツに対する意識の変化

伊藤 考えてみますと、わが国のスポーツは、まず学校にとり入れられそこから始まり、学校対抗ということで、選手が生まれ、選手は学校の名誉のためにスポーツをやるといふ考え方が主流をしめ、大部分の人は、自分のためにやるというのではなく、人からやらせられるということであったわけです。それがつい最近まで続き、スポーツは誰かがお善立してくれるもので、必要な費用は誰かが出すもの、場所は誰かが確保してくれるものと思っていたものです。

それが、最近、人々の間にスポーツや体力づくりに対する意識の変化が起きています。これは、明治以来のエリート中心のスポーツのあり方が反省され、県、市町村、公民館などの行政は勿論、体育協会や体育指導委員などの指導者の活躍で方向転換されてきています。

川野先生が言われたように、子供から老人まで本当にスポーツを楽しむ人々がふえてきました。その一番いい例が老人のゲートボールですね。今県下で五万人の老人が毎日楽しんでいると言われていますが、「運動ばかりして、遊んではか

◇県民総スポーツ運動は「県政の柱」

— スポーツの効用を生かしたふるさとづくり —

司会 県民総スポーツ運動の考え方やすめ方について、川野先生からお話し戴きたいと思ひます。

川野 県民総スポーツ運動というものが、どういう背景の下に生まれてきたかということから申し上げてみたいと思ひます。これまでスポーツは一部の選手層を中心として行なわれてきましたが、最近、スポーツの楽しさや効用が多くなると理解され、健康や体力づくりという観点から、県民の広い階層で行なわれるようになってきました。年齢別にはよちよち歩きの子供から高齢層まで、男女の別なく特に女性の活動が非常に盛んになってきました。また、スポーツの内容も、従来からの陸上競技やサッカー、バスケットボール等の競技スポーツは勿論のこと、ハイキングやキャンプなどの野外活動、ゲートボール、ゴルフ、それに体力づくりを主な目的としたランニン



川野課長補佐

グ、散歩、ママさんのバレーボールなど、その内容も非常に多様化してきています。

そこで、このスポーツ活動への気運を全県下にもりあげ、スポーツ活動がより活発に行われるように諸条件を整備し、健康で明るいコミュニティ形成をめざして県民総参加のスポーツを展開しようと言ふものです。

次に、この運動をすすめていく考え方が、最近、地域社会の連帯感が、色々な条件から非常に薄れてきているので地域の連帯性を高めるためにコミュニティづくりということが叫ばれています。知事の二期目の県政の柱として「新しいふるさとづくり」が提唱されています。これは御承知のとおりで、これも、豊かなコミュニティをどう形成しようかということですね。

スポーツには人々の連帯感を強めるといふ大きな効用がありますから、県民総スポーツ運動は新しいふるさとづくりの重要な柱であるということが言えると思ひます。

県民総スポーツ運動と言うのは、実際には生活の場でスポーツ活動を実践していくことが中心になりますので、必然的